

長野県産米の品質確保のため、 「高温登熟障害」への対策を徹底しましょう！

長野米生産販売対策協議会
長野県農政部農業技術課

本年の水稻の生育は、現時点でほぼ平年並みとなっている地域が多く、3か月予報（7～9月）では、平均気温が高い確率は50%で、気温は高めに推移すると予想されています。

今後、高温条件下で生育が進むと、出穂期の前進や登熟期間中の高温により、胴割米や白未熟米など品質低下（高温登熟障害）が生じやすくなり、検査等級の低下につながるほか、食味や精米歩留まりも悪化します。

出穂後に高温となった平成24年産では、1等米比率が平年比約マイナス3ポイントの93.6%となり、全国順位が前年までの1位から3位になるなど大きな影響が生じました。

高温登熟障害を低減するため、下記の対策を徹底し、品質の高い長野県産米の生産に取り組みましょう。

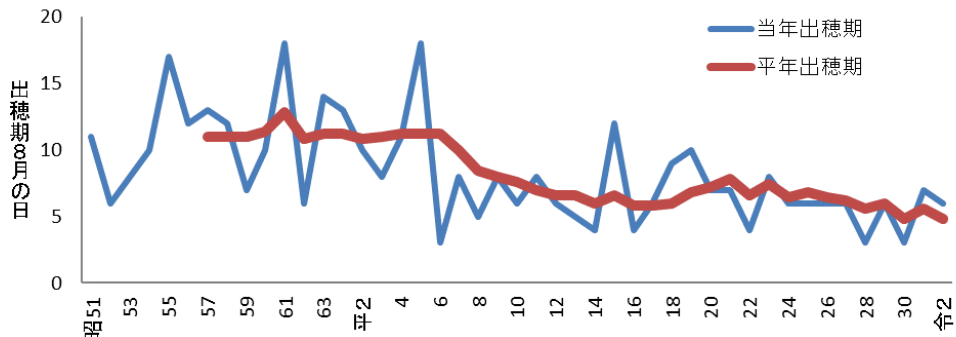


図 コシカリの出穂期の推移（農業試験場、1976～2020年）
注）田植は中苗、5月4半旬、平年出穂期は過去7年中、最高最低を除く5か年平均

【7月中に実施する高温登熟障害対策】

適正茎数（2枚以上の葉がある茎（分けつ）が25本/株）になったら、すぐに中干しを実施！！

○ 適正茎数を確保しましょう！

品種別に目標茎数を確保したら、**直ちに中干しを実施**し、籾数過多を防ぎましょう。なお、大きなヒビ割れが入るほどの中干しは、根を傷めるので、田面に軽くヒビ割れが入る程度とすることがポイントです。

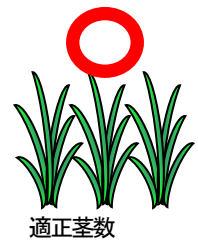
○ 適切な追肥を実施しましょう！

穂揃期に葉色がさめすぎると、胴割米発生の原因となります。地域の栽培指針に基づき、**適期・適量の追肥を実施**しましょう。過剰な追肥や、出穂前10日以降の追肥は、食味の低下につながりますので行わないください。

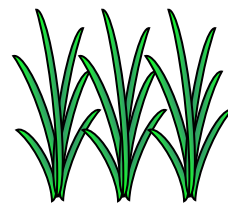
○ 適切な水管理を行いましょう！

幼穂形成後、低温が予想される場合は深水とするなど、生育、気象状況に応じて適切な水管理を行いましょう。

○ 中干しは 目標茎数が確保できたら速やかに実施



○ 幼穂形成期における コシヒカリの標準的栄養状態



葉色：
葉色板 約3.0
葉緑素計 30～35
茎数：
500本/m²程度
(60株植えて27本/株程度)

- ・幼穂形成期から葉色が薄いと胴割粒の多発の危険大！
- ・適正追肥で穂揃期以降も葉色が落ちないように！

【適正な籾数確保と健全な稲体（適正な葉色）維持】を心がけましょう！

【参考】登熟障害の発生要因と特徴及び対策について

○高温登熟による胴割米

発生要因：出穂後、10日間の平均日最高気温が30℃以上で、日射過多の日が続いた場合に発生しやすくなります。

特 徴：玄米の「縦方向」と「横方向」の充実に差が生じることにより、もろく割れやすいお米になります。

対 策：栽培指針に基づき、適期・適量追肥を行い、稲体の活力を成熟期後半まで維持しましょう。また、早期落水を避け、刈り遅れがないように注意しましょう。



胴割粒

○高温登熟による白未熟粒

発生要因：出穂後、20日間の平均気温が26℃以上で、曇天（日照不足）が続き、籾数が多いと発生が助長されます。また、同様の気象条件下で倒伏した場合も、玄米へのデンプン集積が阻害されて発生しやすくなります。

特 徴：玄米にデンプンがしっかり集積されていないため、白く濁った部位が見られます。（腹白・背白粒）

対 策：中干しで莖数（穂数）過多を抑制し、籾数を制限して、玄米へのデンプン集積がスムーズに行われるようにしましょう。



腹白粒



背白粒

※県内の平均的な目標穂数 コシヒカリ 440本/㎡
(60株/坪植えの場合24本/株)
風さやか 460本/㎡
(60株/坪植えの場合25本/株)

※次年産に向けた対策

出穂が早いと高温に遭遇する可能性が高まるので、適正な出穂期となるよう、田植日、品種を検討しましょう。

適正（目標）出穂期 8月12日

※ 「高温傾向になる」という前提で対策をとる心構えが重要です。

※ 佐久農業農村支援センターのHPに掲載している出穂期や成熟期の予測情報なども参考にしてください。

※ 詳しくは、最寄りのJA、農業農村支援センターにお問い合わせください。

連絡先
佐久農業農村支援センター 電話番号 0267-63-3167